

CITATION: Terplan M, Lui S. Psychosocial interventions for pregnant women in outpatient illicit drug treatment programs compared to other interventions *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2008, Issue 3. Art. No.: CD006037. DOI: 10.1002/14651858.CD006037.pub2.
CRG名: Cochrane Drugs and Alcohol Group.

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 2 August 2007
Clib issue No.; N/U: 2008 Issue 3; Update

アブストラクト

背景: 妊娠中の違法薬物使用は、社会的かつ公衆衛生上の複雑な問題である。有効な治療を開発、評価することが重要である。本集団における心理社会的介入の有効性を示すエビデンスはあるが、我々の知る限り、本テーマに関するシステマティック・レビューは実施されていない。

目的: 出産および新生児アウトカム、治療への参加および継続性、ならびに妊産婦および新生児の薬物離脱に対する心理社会的介入の有効性を検討する。要するに、心理社会的介入は、違法薬物使用の減少、離脱の促進、出産アウトカムの改善、臨床への参加の増加のいずれかに繋がるのかを検討する。

検索戦略: Cochrane Drugs and Alcohol Group's Trial Register (2006年5月)、Cochrane Central Register of Trials (Central-コクラン・ライブラリ、第3号、2005年)、MEDLINE (1996年1月～2006年8月)、EMBASE (1996年1月～2006年8月)、CINAHL (1982年1月～2006年8月) および論文の文献一覧を検索した。

選択基準: 妊娠中の違法薬物使用の治療に関して、心理社会的介入と、薬理的介入またはプラセボまたは無介入または別の心理社会的介入とを比較したランダム化試験。

データ収集と分析: 2名のレビューアが別々に試験の質を評価し、データを抽出した。

主な結果: 妊婦546例を対象とした試験9件を組み入れた。随伴性マネジメント(CM)について検討した試験が5件、動機づけ面接(MI)などのマニュアルベースの介入について検討した試験が4件あった。主に、随伴性マネジメントによって試験継続性が改善されるという結果が得られた。CMが違法薬物離脱に及ぼす効果はごくわずかであった。対照的に、動機づけ面接では、試験継続性は低下したものの、これは統計的に達しなかった。どちらに関しても、出産または新生児アウトカムに差はみられなかったが、これは試験で記録されることが稀なアウトカムであった。

レビューアの結論: 現存するエビデンスから、CM戦略は、違法薬物治療プログラムにおける妊婦の治療継続性の改善や、違法薬物使用の一時的な減少に有効であることが示唆される。MIの使用を支持するエビデンスは不十分である。全体的に、入手可能なエビデンスが少ないため、心理社会的介入が産科および新生児アウトカムに及ぼす効果を正確に評価することはできない。この重要な集団において、心理社会的治療法を検討するための優れたエビデンスベースを考案することが重要である。

平易な要約(Plain language summary)

外来違法薬物治療プログラムにおける妊婦への心理社会的介入と他の介入との比較

違法薬物治療プログラムに登録された妊婦における心理社会的介入の有効性。妊娠中に違法薬物を使用する女性は、出産が早まったり、新生児離脱症候群のリスクや集中治療を要するリスクのある低出生体重児を出産する可能性が高まったりします。妊婦が出産前に薬物療法を受けることによって、これらの合併症のリスクは低減します。また、児への懸念も妊婦にとって動機づけとなる可能性があります。治療期間の長さは重要です。心理社会的介入は、治療プログラム継続に対する数多くの障害を克服し、違法薬物の使用を抑制するのに役立つ可能性があります。随伴性マネジメントでは、例えば、薬物使用を断ったか、もしくは行動を変容するための治療に参加した場合にのみ、金券または仕事や報酬の供与による肯定的で支持的な強化を使用します。マニュアルベースの介入では、指示的カウンセリングスタイルによる動機づけ面接が行われます。

本システムティック・レビューでは、随伴性マネジメントが、違法薬物治療プログラムにおける妊婦の治療継続性の改善には有効ですが、違法薬物の禁断に及ぼす効果はわずかであることが分かりました。3～6セッションに及ぶ動機づけ面接は、どちらかと言えば、治療の継続性を低下させるおそれがあります。これらの結果は、14日間～24週間の比較試験9件に基づいており、随伴性マネジメントを使用した研究が5件(346例)、動機づけ面接について検討した研究が4件(266件)でした。1件以外はすべて米国で実施されました。若い女性の多くは、アフリカ系米国人で、未婚であり、結婚歴または離婚歴はなく、失業者でした。女性達はコカインを使用しながらメタドン維持療法を受けていたり、6件の研究ではアヘン剤依存およびマリファナおよびアルコール使用も含まれていたりしました。2試験では、ほぼ全ての女性がニコチン依存症でした。2試験からは、出産アウトカムまたは新生児の院内解毒期間に差は認められませんでした。組み入れた研究のうち、女性が治療を紹介された経緯に言及した研究はありませんでした。マニュアルベースの介入では、強要された人に有効となる可能性が低下します。また、臨床診療で単独で使用される可能性は考えられません。

(監訳 江藤 宏美)

翻訳公開日:2015年 1月 8日

ご注意:この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。